

平成 21 年度 第 2 回海岸工学委員会議事録

開催日時：平成 21 年 11 月 18 日（水） 18:00～20:15

開催場所：茨城県立県民文化センター 集会室

出席者：喜岡相談役，水口相談役，灘岡委員長，後藤幹事長，青木，荒木，池谷，伊藤，富田（今村委員の代理），大山，岡安，木村，小林，坂井，武若，丹治，津田，畑田，間瀬，久保田（松本委員の代理），三嶋，水谷，森，八木，山田，山本（加藤委員の代理），横木，有働の各委員，柿沼，栗山，黒岩，榊山，佐々木，佐藤，重松，柴山，諏訪，高木，高橋，森屋，山本，由比，渡部の各委員兼幹事

資料：平成 21 年度第 1 回海岸工学委員会（平成 21 年 6 月 19 日開催）の議事録案（資料 1），PowerPoint スライド（資料 2）

前回議事録の確認

前回の平成 21 年度第 1 回海岸工学委員会（平成 21 年 6 月 19 日開催）の議事録案（資料 1）が確認・了承された。

審議・報告事項

1. 国際会議関係

（1）Coastal Dynamics 2009（Toranomon, 2009 年 9 月 7-11 日）（水口相談役）

参加者は 180 人余で，好評であった。実行責任者の佐藤前幹事長の尽力で剰余金が出たが，海岸工学委員会に寄付するので有効に使ってもらいたい。次回は（2013 年）は欧州（おそらくはフランス）で開催される。

（2）ICCE2010（上海，2010 年 6 月 30 日-7 月 5 日）（水口相談役）

投稿されたアブストラクトは 700 編弱で，現在査読中。12 月 10 日に採択論文決定のための会合が Baltimore で開かれる。

（3）APAC 2009（Singapore, 2009 年 10 月 13-16 日）（灘岡委員長）

200 人強の参加者で，内訳は韓国から 90 人，日本 70 人，残り 40 人程度であった。次回以降は香港，バリ，インドもしくはスリランカでの開催が予定されている。

2. その他（後藤幹事長）

（1）東京防災展・講演（8/19, 「高潮・津波と東京の防災」，講師：早稲田大学・柴山教授）が開催された。

（2）第 4 期科学技術基本計画に盛り込むべき海洋科学技術関連事項に関する意見について（海洋開発と共同で）意見書を提出した。

（3）委員会活動度評価：総合評価 A（活動資金 A/講演会規模 A/その他の活動 B）について

いずれかが A であれば、総合 A となる。これまでは A/A/A だった。今後も引き続き努力を重ねてゆく必要がある。

(4) 出版企画申請：数値波動水槽

申請は完了しているが、現時点で正式な採択の連絡はない。(10. 参照)

3. 第 56 回海岸工学講演会の実施状況について (横木担当委員)

講演会の参加者数は 11 月 18 日午後 5 時現在 433 名である (記帳簿を計数)。

前日シンポの参加者数は、津波 45 名、適応策 35 名 (重複参加は省く) であった。重複参加者が多数いるようである。適応策シンポの出席は 50 名程度だった。

現地見学会には A コース (鹿島灘) 18 名、B コース (常陸那珂港, 阿字ヶ浦) 24 名の参加があった。見学会開催では、茨城県土木部河川課、港湾課に大変お世話になった。三村実行委員長より、「実行委員会では、茨城大学・筑波大学の他、国総研、鹿島港湾事務所、港空研、水工研、茨城県、五洋建設、不動テトラなどの地元関連機関・会社に多大なご助力を頂きました。」との謝意が寄せられた。

【事務局より】記帳者数は講演会 3 日間で 583 名、懇親会 168 名でほぼ例年並みであった。

4. 海岸工学論文集第 56 巻発刊について (J-stage の準備状況；青木論文集編集小委員会小委員長，渡部担当委員)

第 2 次査読終了時点で 300 編の審査通過論文があったが、3 編不採択、2 編辞退で 295 編となった。

今年度中の J-stage 公開を目標としている。公開後は全く修正ができないため、現在チェック作業に時間がかかっている。小委員会では、著者にはチェックをお願いせず、最終の PDF と Reference については著者の責任で行うことを考えている (チェックを依頼する際のセキュリティ上の問題で著者への依頼を行うのは困難であるため)。小委員会で Reference のリンク関係等の可能な範囲のチェックのみを行うことが了承された。来年度の投稿スケジュールも今年度と同様のスケジュールとする。なお、Journal 名を省略形で書いた場合とそうでない場合について、代表的な論文については省略形の論文名が登録されており、自動的にリンクが張られるようになっている。

5. 海岸工学論文賞候補論文について (後藤幹事長)

候補論文について説明があり (資料 2)、審査方法・審査結果について了承された。論文賞は以下の論文に決定した。

(19) 砕波波峰方向流速の時空間変動と渦スケールの特徴化, 著者：大塚淳一, 渡部靖憲

(45) 確率的ゆらぎモデルによる長周期波の発生・発達の予測に関する研究, 著者：泉宮尊司, 金井 誠

(175) VOF-弾塑性 FEM 連成モデルによる基礎地盤および構造物の変形解析と破壊メカ

ニズムに関する考察，著者：熊谷隆宏

6. 土木学会論文集の再編について（後藤幹事長）

土木学会論文集の再編に関する説明（資料 2）があり，検討課題が示された。

- ・当面は組み版（カラー不可）を維持する（2011 年以降に検討）。
- ・今後の特集号について，アブストラクト申込は現行通り日本語のみの受付とするが，フルペーパーは英語の原稿も受け付けてはどうかとの提案があり（現行では発表については英語使用を許可），議論が交わされた。

英語によるフルペーパー原稿受付提案の趣旨（灘岡委員長）

水工学講演会，海洋開発講演会では，英語でのフルペーパー執筆が許されており，外国人（主に留学生）に対する専門的な議論の場を提供しているのに対し，海岸工学講演会で外国人が発表する場合にはフルペーパー原稿を日本語に訳す必要があり，論文投稿の敷居が高くなっている。この現状を改善する必要があるのではないかと。

海岸工学論文集の位置付けについての意見

- ・外国人もプロシーディングとジャーナルを使い分けている。速報性を重視したプロシーディングの位置付けにしてはどうか。水工学論文集（ページ制限あり）に英語で載せているものを JHHE に投稿している場合もあり，水工学論文集では速報性を重視している。
- ・海岸工学論文集の英語のタイトルは **Journal of Coastal Engineering** となっており，ジャーナルの位置付けとしてこれまで発刊されている経緯がある。ジャーナルとしての位置付けとする場合には，現在のページ制限（5 ページ）についても併せて議論する必要がある。
- ・論文集の形態の発展と，講演会の機能について考える必要がある。通常別々に備わっているものを海工講演会では同時に備えている。

二重投稿（CEJ との関係）についての意見

- ・全く同じものを 2 つに乗せれば二重投稿になるが，例えば内容を倍に増やし，タイトルをそれにあうものに変えれば二重投稿にならないと考えればよいのではないかと。二重投稿に対する基準を作る必要がある。英語で書いたものをパワーアップして CEJ に出すといった，CEJ にとってもよいメカニズムを作るとよい。IJOPE では「ISOPE で発表された論文である」と明記してそのまま載せている。
- ・留学生には CEJ あるいは土論 B 部門に英語で投稿してもらい，海工で発表できる仕組みをつくってはどうか。CEJ の特集号あるいは Letter 誌のカテゴリーを設置しこれに投稿する，あるいは，土論のノートに投稿することにすれば，二重投稿を防ぐことができるのではないかと。投稿から発表までに時間がかかると留学生が日本にいない可能性があるが，査読者を国内に限定し海工と同じように委員会で査読者を決定すれば，期限までに査読を行うことは可能である。期限までに修正が終わらない場合は発表不可とすればよい。

外国人（留学生）に対する講演会機能の提供方法について、今後 1 年程度で結論を出すことを目指すことになった。英語投稿を認める場合の投稿プロセスやフォーマット等についても検討していく。

7. 来年度以降の出版形態（後藤幹事長）

次年度以降の負担金増額（35000～40000 円）について了承された。会場費の補助が自治体から出ない場合がある、将来紙版を廃止すると論文集収入がなくなる等、経費増額要素に対する措置である。

8. 第 57 回および第 58 回海岸工学講演会の開催（会場など）について（森担当委員，高橋担当委員）

第 57 回海岸工学講演会（京都市，2010 年 11 月 10－12 日）の準備状況について説明があった。直前のホテル予約が難しいため、早めにホテルを予約するよう委員会の Web 上で呼び掛ける（掲載済み）。

第 58 回海岸工学講演会は 2011 年 11 月 8－11 日盛岡で行うことが了承された。岩手大学の了解はとっており、会場（アイーナ 岩手県民情報交流センター）も予約済みである。

9. Coastal Engineering Journal について（投稿状況，査読状況，JAMSTEC 中西記念賞，World Scientific との直接交渉）（水谷 CEJ 編集小委員会小委員長，柴山 CEJ 編集小委員会前小委員長）

今年 10 月 28 日時点では，投稿論文 63 編中 14 編が国内であった。

投稿者が増えており，査読には最短でも半年かかっている。現在はすべてのジャーナルについて査読を行っているが，他のジャーナルの状況も考慮し，論文レベルが著しく低い場合には受け付けた時点で却下することを検討している。

主要国で登録数が減っているが（資料 2），購読状況には個人の購読は入っておらず，World Scientific の契約状況のデータに不正確な部分がある。

APAC2009 の際に出版協力金について World Scientific との直接交渉を行ったが，ほぼゼロ回答（資料 2）なので今後はかなり強い姿勢で交渉を進める。J-stage を最大限に利用し World Scientific との契約をやめる選択肢や，他の出版会社との契約を考えるとという選択肢もあるが，移行にかかる再契約のリスクを考えると他の出版社との契約は現実的ではない。

10. 各小委員会報告（広報：武若担当委員，沿岸域：重松担当委員，津波：富田担当委員（今村委員代理），数値波動（出版企画申請について）：岡安担当委員，温暖化：横木担当委員）

各小委員会より説明があった（資料 2）。【津波】「地震・津波複合災害の推定手法および対策研究小委員会」が地震工学委員会のもとに設立された。連携・調整の小委員会として継続の依頼があり、了承された。【数値波動】来年の海工までには出版したい。

1 1. 第 46 回水工学に関する夏期研修会（B コース）について（高橋担当委員，重松担当委員）

【第 45 回】参加者数は微減。一般の参加者は多かったが，学生の参加者が少なかったのが原因である。

【第 46 回】2010 年 8 月 11－12 日に神戸大学で行うことに決定した。講演でオープンになっていないようなデータを公開するといったインセンティブを持たせることで参加を促すという方向性が示され，基本的にはこの方向で進めることが了承された。

1 2. その他（佐藤委員）

Coastal Structures 2011（Yokohama, 2011 年 9 月 5－9 日）

Coastal Sediments 2011（Miami, 2011 年 5 月 2－6 日）

について案内があった。

（議事録担当：有働）